

平成二十二年四月一日発行（毎月一回1日発行） 通巻八四三号
昭和二十五年四月二日第三種郵便物認可

火星

平成二十二年四月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

きさらぎの道は鯉田につきあたり

竹山のいちにち騒ぐ種浸し

畦をくるお齋に舞ひし春の雪

七三のポマードの上囀りぬ

紙漉きの音かすかなるお中日
那智石の濡れてゐるなり糸桜
連翹に声張つてゐる雀かな
屯してお玉杓子に隙だらけ
朝日さす茶山の裾を春の猫
鴉なにか水に落としぬ春夕べ

太白星

柳生千枝子

風邪声の姉の一語を聞き洩らす
犬寒し世を知り尽くしたる如く
夕映えの寒さ焼きたてパン抱き
ガラス拭く歳晩の顔映しつつ
大聖樹瞬く意志のあるやうな
初泣きの咽喉あたらしき嬰の声
咳こんでをりぬ写真の夫の前

杉浦典子

宝船枕はづして子のねむる
松風に向きたる父の初鼓

恐竜のたまごに罅や雪もよひ
寒月下空つぽの罨にほひけり
灯台の影の伸びきし野水仙
寒芹をすすぎし水の青みたる
花びら餅母在りし日のやうに晴

浜口高子

I T にそつぽ向きをり紙懐炉
干蒲団の間を特急電車過ぐ
人參を齧り頤寒かりし
冬蜂が屋台の湯気を舐めたり
大寒や俎の烏賊発光す
潮風を背に吉兆の渦に入る
露座仏の千の螺髪に日脚伸ぶ

火星作品 山尾玉藻選

鬢にさざなみ立てる淑気かな 大和郡山城 孝子

姉に客来てゐる夕べ鳥総松

鶏のあらそふ影や鳥総松

節分の日の竹叢に竹の影

二上山に落暉とどまる針供養

池の面に灯の浮いてゐる去年今年 宝塚山本耀子

牛王宝印受く熊野路の初鴉

弓袋つん抜けてゐる初電車

松過の昼や祇園の白々し

ゆづり葉の一枚吹かれとんど跡

大年の須磨寺に望上りけり 明石戸栗末廣

日輪を大きく巡り初鳶

大寒の山中にゐて槌の音

このごろの耳しい兆す水仙花
篋に音の移れる初霰
歳晩の灯のせり出せる生花店
初みくじ人を離れて開きけり
歩み板鳴らし島より春著の子
水平に七草籠を受けとりぬ
全集の付箋の数に湯ざめせり
棒鱈のよぢれに年の詰まりけり
階の半ばで年の明けにけり
雪暮れの恵方日輪にじみぬる
七草の育ちすぎぬる菘かな
霜ぬれの靴紐結ぶ探鳥会
校庭に砂塵上がりし五日かな
雪催ひ若狭塗箸にほひけり
寒木の名札の映る澱かな
ロビーに会ふ成人の日のチマチョゴリ
てつちりに下戸のひとりの加はりぬ

宝塚蘭定かず子

河崎尚子

小林成子

選のあとに

山尾 玉藻

蟹にさざなみ立てる淑気かな 城 孝子

以前、宮崎の都井岬で馬の群を眺めたことがある。姿自体は野暮だったのだが、野性の逞しさが眩しかった。掲句の馬はそんな野性のもではなく、手入の行き届いた流麗な馬を思わせる。「さざなみ立てる」の穏やかさがそう感じさせ、その響きにも新年らしい風韻がある。焦点の絞りが効いた典雅な叙景句である。

松過の昼や祇園の白々し 山本 耀子

ごくありふれた一般の女性にとつて、「祇園」界限は異次元の雰囲気を含める空間、という印象が強い。作者もそのようなイメージを抱いて「祇園」を訪れたのであろうが、松節もとれた町並は意外に普通の佇まいを見せ、昼の陽光に晒されていたのだろう。そんな存外な次第を「白々し」と述べ、なるほどと思わせる。

大年の須磨寺に望上りけり 戸栗 未廣

「須磨寺」には父岡本圭岳が心血を注ぎ建立した正岡子規の句碑がある。一年が静かに終ろうとする夜、「望」の月明

を浴びる句碑はいかばかりかと感慨深い。これは火星に縁ある者の偏った思いかも知れない。しかしそれを度外視しても、歴史や文学に名を刻む「須磨」の固有名詞が計り知れぬニュアンスを伝え、正調かつ風格ある一句であることに違いはない。敢えて附記するならば、へ暁や白帆過ぎゆく蚊帳の外 子規の碑は昭和九年仲秋の望の日に除幕されており、掲句はそれをよりどころとしている。

水平に七草籠を受けとりぬ 蘭定かず子

最近では正月四日頃より七草を揃えた籠がスーパーに並び始め、それを抵抗なく眺めている自分が少し哀しくもある。作者も店先で「七草籠」を買い求めたのだろうが、「水平に」受けとりぬ」の丁寧な行為に、七日は七草粥で祝うものとするこころ映えが十分に窺える。作者にとつて七草粥は年に一度の大切なセレモニーなのである。

階の半ばで年の明けにけり 河崎 尚子

大晦日の夜半、初詣にかけた寺社での実体験がそのまま句になったようだ。余りの人出に神殿まで思うように進めず、遂に磴の途中で時計が零時を指し、百八つつ目の除夜の鐘を聞く羽目となったのである。周囲から新年の挨拶が聞えたり、溜息が漏れたり、微笑ましい年の明けである。(以下略)

恒星圈

山田美恵子

宝船敷く水玉の枕かな
マツチ箱使はぬままに霜の夜
寒林に来てつぶやきともならぬ声
寒晴や白の座りし神の庭
松過の林檎の蜜に夜雨きし

堀志皋

山本耀子

大声で福笹囃す緋の袴
木守柿皮だけとなり乾きをり
太陽の高くなり来し冬木の芽
葉牡丹の下葉摘みをり割烹着
雪かきの雪積まれあり遍路道

建仁寺刈り込みし茶の返り花
着ぶくれの和尚に習ひ竜鳴かす
さび釘の入るる歳暮や丹波より
雪もよひ並ぶ屋台に酒の粕
残り福笹のちぢれを捧げもつ

丸山照子

米澤光子

黄八丈のコートの舞妓雪もよひ
冬籠白き卓布に燭ひとつ
祓はれて子の初髪のかがやけり
梅さぐる簷に妓の名の千社札
寒紅をひく昼くらき祇園かな

ぬく飯に黄身盛上るもがり笛
初声の発ちたる枝のしづくかな
口開けて風花の中抜けにけり
手を振つて節分の鬼呼び戻す
寒月と出窓の卵光り合ふ

獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

お降りやお包みの嬰深抱きす
ちりぢりに干菜ながるる飛鳥川
二ン月やみやげ物屋の細開き
春隣屋根より滑車下りて来し

涼野海音

盲導犬座つてゐたる初詣
元日の川を流るる木箱かな
買初の河馬の句集を開きけり
湯気吹いて初金毘羅のこぶうどん

川端俊雄

冬ざれや孔雀は羽根を全開す
風花や貨車つなぐ音とほくより
雪搔の人につき行く湯治宿
待春や加賀に五色の昔菓子

天谷翔子

卓の上の眼鏡に指紋寒土用
父に似し耳とがらせて息白し
手櫛してまた手袋をはめにけり
革手袋指輪の形のもり上がる

緒方佳子

えべつさん聞いて下さい笹の鈴
福笹を肩に門前釜めし屋
九十のお替りしたる齋粥
寒晴やバツクネットの破れ穴

笠置早苗

雨あとの松のみどりの淑気かな
鳶の輪やほどよきものに粥柱
松過の雑巾板となりゐたる
凍蝶の翅を合はせてゐたりけり

西村節子

歌垣の山平らかや初鴉
たつぷりと髪結ひ上げしシヨールかな
観音につながる綱や水温む
フオアグラの缶詰もらふ風邪心地